虹　球場からキャンパスへ

⑯⑦ 最前列で授業を受ける元野球選手

プロ野球選手を経て、国学院大で学んだ幸山さん

身長190㌢。ただ身長が高いだけでなく、肩幅もある。舟橋村出身の幸山（こうやま）一大（かずひろ）さん(26)はどこにいても目立つ。

東急田園都市線「たまプラーザ駅」（横浜市）の人混みの中を歩いていると、学生のグループから「よっ」「ひさびさ」と声を掛けられる。

幸山さんは、この駅近くにキャンパスがある国学院大の４年生。大学に入学したのは22歳だった。「１年生の時は高校卒業したばかりの同級生が幼く見えたけど、今は全然。違和感ないですね」

幸山さんは元々プロ野球選手だった。体格の良さと長打力を見込まれ、高校卒業後に福岡ソフトバンクホークスに入団した。４年間のプロ生活を終えて、次のステップに選んだのが大学生だった。

◇

小学２年生で野球を始めた。当初は目立たなかったが、５年生になって才能が目覚めた。遠くまで投げ、打ち飛ばせるようになった。足も速い。特別なことをしたつもりはない。ただ夢中で練習してきた。一つ言えるとすれば、成長して筋肉が付いた。当時で175㌢。イメージする動きと体がかみ合った。６年生になると、ランドセルではなく、中高生が部活動で使うエナメル製のバッグで通学した。その頃には182㌢になっていた。

強豪の富山第一高校に進んだ。授業前の朝６時半にはグラウンドで自主的に練習し、夜は午後11時近くまでバットを振った。「先輩や同級生がやっているのに、布団の中にいていいはずがない。意地です」

２年生で４番を任され、夏の全国高校野球選手権に出場した。憧れの甲子園だったが、緊張はしなかった。ただバックスクリーンが富山の球場より大きいせいか、投手を近くに感じた。気持ちが高ぶった。ここ一番の場面で快音を響かせ、富山県勢としては40年ぶりとなる８強入りに貢献した。

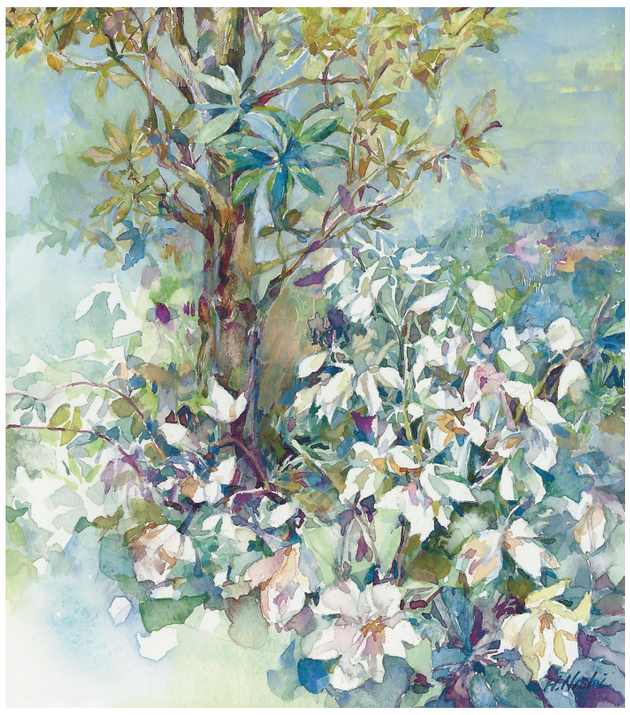
学年が一つ上で、共に甲子園で活躍した宮本（みやもと）幸治（こうじ）さん(27)は「大きい大会後は普通の選手なら調子を崩す。でも、幸山はその後も結果を出していた。それを見た時、『ああ、こいつは伸びる』と思った」と振り返る。

◇

幸山さんは注目される存在になった。学校にスカウトがやって来た。それまでプロを意識して練習していたわけではない。ただ、甲子園を目指していた。もちろんプロ野球選手としての姿を想像したことくらいはあるが、それは遠い夢物語だと受け止めていた。しかし、一気に現実味を帯びた。

2014年10月のドラフト会議。ホークスから育成枠１位で指名を受けた。１軍の公式戦に出る「支配下」の契約枠ではないが、富山第一高校の硬式野球部創部以来、初となるプロ選手だった。「まあ、頑張ってみるか」と気持ちは落ち着いていた。取材陣に囲まれる喧噪（けんそう）はひとごとのようだった。

公式戦が始まると、２軍と３軍を行ったり来たりした。プロは夏の甲子園とは違う。短い大会期間だけのドラマではない。年間を通じて、結果を出す必要がある。ある日だけ調子が良くても、奇跡を起こしても生き残れない。


「白春」西治子

飛び抜けたスター選手を別にすれば、一人一人の打球やスイングのスピードは大差がない。１軍で活躍する選手と、そうじゃない選手との差は再現性だった。同じような球を、次の日も同じように打てるか。幸山さんが行き詰まりを感じたのもそこだった。「いろんな人の意見を聞きすぎて、思うようにプレーができなかった」

４年目を終え、戦力外通告を受けた。２軍戦出場は通算62試合にとどまった。プロ最後の試合は紅白戦だった。１打席立ったか、２打席立ったか記憶にないが、凡退した。秋の青空が広がっていたことは覚えている。

選手としては結果を残せなかったが、真面目な人柄や日頃の練習態度は買われていた。球団から親会社のソフトバンクへの就職を持ち掛けられた。しかし、小学校から野球漬けで、パソコンもまともに使えない。スマートフォンをいじれる程度では、大卒の同僚に引け目を感じるかもしれない。

球団からチラシを受け取った。選手のセカンドキャリアのため、日本プロ野球選手会と国学院大がある協定を結んだという。入学金と学費を免除する特別な制度を、引退した選手は利用できる。その案内を見て、就職ではなく、学び直す道に興味を持った。野球の指導者になることも視野に保健体育の教員免許を得られる学科を受験した。

面接試験では「あなたは幼い頃から運動神経抜群だったろうが、運動が嫌いな子どももいる。どう向き合うか」と問われた。冷や汗をかいた。スポーツが当たり前の半生で、そんなことを考えたこともない。「４年間の大学生活で答えを見つけたいです」。入学前に課題を突きつけられた。

◇

学生生活の全てが新鮮だった。四つも下の同級生たちは幸山さんのことを「ハピさん」と呼んだ。苗字の「幸」を英訳した「ハッピー」にちなんだものだ。体育会的な上下関係に縁がない女子学生は「ハピ」と呼び捨てにした。授業後には、同級生とマクドナルドやスターバックスに行った。野球ばかりの高校生の頃には、過ごせなかった日常だ。「これが普通の青春か」と思った。

講義を受けるには野球とは違う集中力が必要だった。守備や打席にいる間は相手方の一挙手一投足に目を向けるが、ベンチに戻れば緊張は少し解ける。しかし、授業中は気を抜けない。それも心地良かった。「せっかく入ったのだから」と、授業では最前列の真ん中に座った。現役時代に培ったリーダーシップなのか、グループディスカッションの中心になった。活発に発言する幸山さんに同級生の岡田（おかだ）大（だい）さん(22)も刺激を受けた。「幸山さんは、人生から野球を引き算しても、残るものがたくさんある。何だって成功できそうな気がする」と言う。

大学生活の中で、子どもの運動指導法についても考えを深めた。運動神経のいい子は挑戦する回数が多いから成功体験が多い。だから自信を持つ。でも、運動が苦手な子は挑戦が怖い。挑戦しないからこそ、成功体験が少ない。その悪循環が運動嫌いを招くと考えた。「大人は子どものハードルをなくすことはできないけど、低くすることはできる。まずは楽しいと思ってもらう。楽しいことは自然とやれる」

教員免許を取得後、都内のイベント会社でインターンを始めた。幸山さんは野球未経験者を含めた子どもたちの野球教室を担当している。自治体や企業の協賛を得て、体を動かす機会を提供する。野球を教えるというより、「打つ、投げる、走る」という基本動作を手ほどきする。大学に入ってから考えた「ハードルを下げた野球」だ。「定量的なデータがあるわけじゃないけど、今まで家でゲームをやっていた子が外で遊ぶようになったという話を聞きます。やっている意味を感じる」

４月からはインターン先の会社にそのまま就職する。他の業務も加わるが、野球が軸になるのは変わらない。

ホークスの同期たちの中には、一軍で活躍している選手たちがいる。運命の分かれ道次第では「自分ももしかしたら」と思わないこともない。でも、それを口にすることはない。「言い出したらキリがない。仲間には、ただただ『頑張ってほしい』と思う。僕も別の形で頑張るだけ」

いつか故郷で甲子園を目指す高校生を指導するかもしれないが、それはまだ少し先の話。今は野球と、スポーツの裾野を広げたい。「自分に伝えられるのは野球。僕のルーツは結局野球」

もうすぐ卒業式を迎える。パソコンは使えるようになった。

硬式野球では、高校１学年当たりの部員数は全国で４万人強です。一方で、日本野球機構（ＮＰＢ）のドラフト会議で毎年指名されるのは、育成枠を含めて100人程度です。プロ野球選手になるのは奇跡的なことです。幸山さんはプロ野球で得た貴重な経験を生かし、大学で学び直しました。新しい舞台での活躍を期待しています。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は４月１日（土）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局